

みんなで作るよ 広場の人形劇!



2018 → 2023

人形劇ワークショップの記録とそのつくりかた



はじめ

「みんなでつくるよ広場の人形劇! (以下、広場の人形劇)」は、障害のある人とない人がまざり合ってつくる人形劇ワークショップです。アートを通して誰もが豊かに生きることのできる社会の実現を目指して活動するNPO法人エイブル・アート・ジャパンのプログラムとして、これまでたくさんの人と一緒につくってきました。

その場で生まれる出来事を大切に、手探りでつくってきた広場の人形劇で起こっていたこと、そこから見えてきたこと、ハッとしたりワクワクしたり心が動いたことを、たくさんの人に伝えたい! という思いから生まれたのがこの冊子です。

また、これから障害のある人との表現活動をはじめたい人や、すでに実践している人に向けた活動のヒントにもなるよう、広場の人形劇でおこなっている誰にでもひらかれた場のつくりかたや、準備についてもまとめています。

この冊子を通して、人形劇が持つ力と、さまざまな特性の人が集まることで生まれる可能性をすこしでも感じてもらえたらうれしいです。どうぞ気になるところからページをめくってお楽しみください。

それでは、はじめは始まり〜!

もくじ

- 04 みんなでつくるよ広場の人形劇! って?
- 06 活動年表
- 08 人形劇ワークショップをやってみよう! 準備編
- 10 参加者へのお手紙
- 12 ある日のワークショップ
- 14 ある日のワークショップ オンライン編

- 16 「創作する身体」 工藤夏海
- 17 ごちゃまぜギャラリー
- 22 ふりかえり座談会

みんなで作るよ 広場の人形劇!って?

障害のある人とない人が混ざり合って、それぞれの特性を活かしながつくる人形劇ワークショップです。

人形劇は何千年も前に世界各地で生まれ、さまざまな手法で上演されている舞台芸術です。人形をつくる・動かす、舞台装置をつくる、声や楽器で音楽をつける、即興の劇をする、それを見るなど、好きなことで参加できるのが魅力です。

広場の人形劇では、大きな人形、小さな人形、箱や布、新聞紙などいろいろな物で演じながら、その場でひらめいたことやその場にいる人が影響し合って生まれるものを大事にしてきました。



きっかけと経緯

2018年度、「仙台市文化プログラム(*1)」として、障害のある人が主体的に関わることができる創作や身体表現の事業「SHIRO Atelier&Studio(*2)」をスタート。そのなかで初めて美術家の工藤夏海さんが主宰する「人形劇団ポンコレラ」によるワークショップを開催しました。これをきっかけに、2019年度から「みんなで作るよ広場の人形劇!」として定期的にワークショップを開催してきました。



(*1) 仙台市文化プログラム
東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、仙台市及び公益財団法人仙台市市民文化事業団が市内に拠点を置く団体または個人事業主と共催で実施した文化プログラム。

主催 NPO 法人エイブル・アート・ジャパン 東北事務局

「まぜると世界が変わる」をコンセプトに、「障害者芸術活動支援センター@宮城(愛称:SOUP・スープ)」を運営しています。福祉・文化・教育・行政などさまざまな機関と連携しながら、障害と芸術文化に関わる相談支援、人材育成、ネットワークづくり、芸術文化活動に参加できる機会づくりなどに取り組んでいます。

ファシリテーター

工藤夏海/くどう・なつみ
(美術家、人形劇団ポンコレラ、でもトラ!)

その場にいる人と即興でおこなう人形劇「まちがい劇場」や「ムシユク相談所」のほか、仲間と大きい人形やプラカードをつかってパレードやアピールする活動をしている。身近にあるものでつくるのが好き。

人形劇団ポンコレラ

工藤夏海が主宰し、仙台を拠点に活動する、お話・人形・舞台全てが手づくりの人形劇団。即興のアイデアがそのまま具現化したようなキャラクターと気張らないオフビートなユーモアが魅力。

(*2) SHIRO Atelier&Studio
「仙台市文化プログラム」として NPO 法人エイブル・アート・ジャパンが提案、採択され実施してきた事業。障害のある人とない人がともに活動できるアトリエと身体表現の場をひらいてきた。

名前に込めた思い

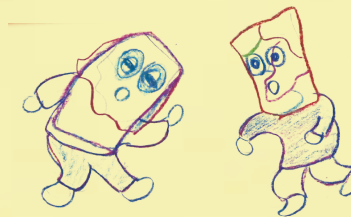
広場は、いつ誰が行ってもいいし、好きに過ごしていい場所です。広場のように一人ひとりの選択や表現が尊重されて、影響を与え合って、その場にいるみんなで見たとののない人形劇をつくれたらいいなあと思って「みんなで作るよ広場の人形劇!」という名前が生まれました。



参加者

障害のあるなし、年齢にかかわらず、誰でも参加OK!
付き添いで来た親やきょうだいもモリモリ制作します。

制作サポート・ケアワーカー
参加者の特性や得意なことに
応じて制作をサポートする人。



ファシリテーター
テーマやプログラムの
ベースを考え、スタッフ
やゲストと協働しながら
参加者の動きに合わせて
場をつくる人。

広場の人形劇 をつくる人

ボランティア

当日の準備から
片付けのサポート、
参加者の見守りなどを
する社会人や学生。



ゲスト

まだ広場の人形劇に
関わったことのない
アーティスト、造形作家
など。

スタッフ

ファシリテーターやゲストと一緒に
企画を考える、会場の予約、広報、
参加者への連絡など、事業の調整や
運営を担当。いつのまにか一緒に手
を動かし、劇に参加していることも!



活動年表

仙台市内の文化施設を活用し、毎回さまざまなテーマでおこなわれてきた広場の人形劇。
2018年度から2023年度までの活動を一覧で紹介します。

2018年度

◎2019.03.03 / 青葉の風テラス(仙台市地下鉄東西線「国際センター駅」2階) / 「家にあるもので大きい人形をつくってみよう!」 / 人形劇団ボンコレラ ▼



2019年度

◎2019.11.09 / 青葉の風テラス / 「人形をつくるよ〜」 / 工藤夏海

◎2019.11.30 / 日立システムズホール仙台 B1階 ビデオスタジオ / 「からだであそぶ」 / 小野詩織

◎2019.12.21 / 青葉の風テラス / 「きこえる動き、みえる音」 / 人形劇団ボンコレラ ▼



◎2020.01.11 / せんだいメディアテーク 7階 スタジオb / 「モードだね! 装いをつくろう」 / 佐々木桂(一般社団法人アート・インクルージョン)

◎◆2020.02.02 / せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア / 「人形であそぼう」 / 人形劇団ボンコレラ

2020年度

◎2020.05.30 / オンライン / 「はじめてのオンライン開催!」 / 工藤夏海 ▼



◎2020.07.26 / オンライン / 「素敵な表現に注目! フィーチャータイム!」 / 人形劇団ボンコレラ

◎2020.09.12 / 青葉の風テラス / 「グループに分かれて舞台をつくってみよう」 / 人形劇団ボンコレラ

◎2020.11.07 / 青葉の風テラス / 「空き箱でお面づくり! 変身して自由に動いてみよう」 / 人形劇団ボンコレラ

◎2021.01.09 / 青葉の風テラス / 「小さなテーブル人形劇のはじまり、はじまり〜」 / 人形劇団ボンコレラ



2021年度

◎2021.07.10 / 青葉の風テラス / 「真似からはじまるストーリー!」 / 工藤夏海・佐々木桂

◎2021.08.08 / 青葉の風テラス / 「『大きな人形』をつくろう!」 / 工藤夏海・佐々木桂

◎2021.11.20 / 日立システムズホール仙台 B1階 ビデオスタジオ / 「人形劇で使う『舟』『人』『かざり』をつくろう!」 / 人形劇団ボンコレラ

◎2022.01.15 / 日立システムズホール仙台 2階 交流ホール / 「人形劇をつくってみよう」 / 工藤夏海・佐々木桂 / ゲスト おはなしてっちゃん・佐竹真紀子 ▼



◎2022.03.25 / 日立システムズホール仙台 2階 交流ホール / 「じゅんぴたいそうワークショップ」 / 工藤夏海・佐々木桂

□2022.03.26 / 日立システムズホール仙台 2階 交流ホール / 「みんなで作るよ広場の人形劇! 上演」 / 工藤夏海・佐々木桂

2022年度

◆2022.06.11 / ぶらんど〜む一番町商店街 / 「Ai どんどこ市」でパレード / 主催: 一般社団法人アート・インクルージョン

◎2022.08.07 / 仙台フォーラス 7階 エイブル・アート・ジャパン フリースペース(以下、AAJ フリースペース) / 「ボックスシアターであそぼう」 / 工藤夏海・佐々木桂

◎2022.09.11 / AAJ フリースペース / 「フラットシアターフェスティバルの準備をしよう」 / 工藤夏海・佐々木桂

◆2022.09.17 / 宮城野区文化センター、宮城野区中央市民センター / 「フラットシアターフェスティバル」のオープニングでパレード / 主催: 文化庁、NPO法人アートワークショップすんぷちよ

◎2022.10.15 / AAJ フリースペース、even(仙台フォーラス 7階) / 「片手人形をつくろう!」 / 工藤夏海・佐々木桂 / ゲスト 本川東洋子

◆2022.10.22 / ブランチ仙台 WEST 「みんなのマルシェ in ブランチ仙台」でパレード / 主催: 特定非営利活動法人ふうどばんく東北 AGAIN 共催: ブランチ仙台

◎2022.11.19 / AAJ フリースペース、even / 「みんなの人形劇場をつくるよ!」 / 工藤夏海・佐々木桂 / ゲスト 大沢佐智子

□2022.12.25 / PARK(仙台フォーラス 7階) / 「『メリークリスマス! ぐちゃまぜシアターの聖なる人形劇』上演」 / 工藤夏海・佐々木桂 ▼



記録映像

ワークショップや上演会の記録映像を SOUP の YouTube チャンネルで公開しています →



◎2023.01.15 / AAJ フリースペース / 「リズムは言葉」 / 工藤夏海・佐々木桂 / ゲスト 飯野未奈美

◎2023.02.25 / AAJ フリースペース / 「表現のはばをひろげよう」 / 工藤夏海・佐々木桂 / ゲスト てんたん人形劇場 ▼



2023年度

◆2023.06.10 / ぶらんど〜む一番町商店街 / 「Ai どんどこ市」でパレード / 主催: 一般社団法人アート・インクルージョン

◎2023.07.30 / AAJ フリースペース / 「物が語りはじめる」 / 工藤夏海

◎2023.10.29 / AAJ フリースペース / 「人形と音、旅に出る」 / 工藤夏海 / ゲスト 山路智恵子 ▼



◎2023.12.03 / AAJ フリースペース、ぶらんど〜む一番町商店街 / 「なりたいたい物になってあるく」 / 工藤夏海 / ゲスト 菊池聡太郎

凡例
◎ ワークショップ □ 上演 ◆ パレード
日程 / 会場 / 「テーマ」 / ファシリテーター / ゲスト

2018〜2021年度
「仙台市文化プログラム」として実施(主催:NPO法人エイブル・アート・ジャパン、仙台市、公益財団法人仙台市市民文化事業団)

2022〜2023年度
「持続可能な未来へ向けた文化芸術の環境形成助成事業」(助成:公益財団法人仙台市市民文化事業団)に採択され、実施(主催:NPO法人エイブル・アート・ジャパン)

人形劇ワークショップを やってみよう！ 準備編



広場の人形劇は、障害のあるなしにかかわらず、誰でも参加ができて、自由に表現を楽しむことができる場(*1)を目指しています。ここでは、そうした場をひらくうえで、広場の人形劇がおこなっている準備について紹介します。

1 広報

参加者募集のためのチラシをつくって配布します。おもなチラシの配布先は、仙台市内や仙台市近郊の県内地域を中心に、文化施設、社会教育施設、特別支援学校、特別支援学級、福祉事業所、相談支援事業所などです。学校へは、全生徒に案内が届くよう、人数分のチラシを送付しています。

2 申込受付

ウェブから申し込みができる専用フォームのほか、メール、電話、ファクス、来所での受け付けをしています。視覚障害や聴覚障害のある人、デジタル機器の操作が苦手な人など、さまざまな人が参加することを想定して、受付方法も多様にしています。また、申込事項として名前や連絡先などの基本情報に加えて「必要な配慮(*2)」も聞いておきます。

3 ヒアリング



初めて参加する人には、事前に電話やメールでヒアリングをします。必要な配慮があるときは、その内容について詳しく聞き、どんな対応ができるかを一緒に考えます。

☑ 確認すること

申込のきっかけ(なにで知ったか)/好きなことや苦手なこと / 必要な配慮 / そのほか不安なことやスタッフに共有しておきたいこと など

ある日のヒアリングとスタッフの対応

参加者 | 小学校1年生、自閉症、知的障害

ヒアリングした人 | 保護者(お母さん)

ヒアリング内容 |

きっかけ…仕事が好きなので創作活動の場を探していたところ、学校からもらったチラシを見て申し込み

好きなこと…工作、音楽を聞くこと

苦手なこと…初めて行く場所や小さい子どもの泣き声

必要な配慮…耳から情報を得ることが苦手なので、文字で説明してほしい

不安なこと…じっとしてられない、集中が続かない

スタッフの対応 |

・事前に会場の様子について説明する(広さや窓の有無など)。

途中で会場の外に出て気分転換もできることを伝えた。

・参加方法は自由なこと(見てだけでもいい。無理に合わせなくてもいい)、疲れたら休んだり、途中で帰ってもOKなことを伝えた。

(*1)このような場や活動のことを「オープンアトリエ」といいます。詳しい場のつくりかたは、「オープンアトリエのつくりかた 表現の場をひらいてつなげるためのヒント集」(編著：一般財団法人たんぼの家)も参考にしてください。→ <https://tanpoponoye.org/news/general/2021/08/123212168/>

(*2)障害のある人などが、会場に来るまでや参加するときに必要な配慮を聞いておくことで、運営側も事前に準備や心構えができます。手話通訳などの情報保障もふくみます。対応方法がわからないときは、専門機関や全国に設置されている「障害者芸術文化活動支援センター」(厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業)に相談しましょう。→ <https://arts.mhlw.go.jp/center/>

4 参加者への当日の案内

開催日の1週間前を目安に、参加者への当日の案内をメールや電話で連絡をします。

5 プログラムの内容を考える

人形制作(大きい人形、小さい人形、お面の形の人形など)、人形操作、舞台装置、音楽、即興芝居、ストーリー、パレードなど、人形劇のどの部分にスポットを当てるか、前回のワークショップまでに起こったことの中からピックアップしたいものをふくめ、内容とタイトルを決めます。

当日の案内で伝えること

- ・日時
- ・当日の流れ | 受付時間、開始時間、終了時間
- ・会場 | 会場までの移動方法の確認、交通機関のご案内
- ・参加費 | 有料であること、参加費の金額
- ・持ち物
- ・当日のワークショップの内容 | ファシリテーターやゲストが、当日の内容についてまとめたイラストや写真入りのお手紙をメールに添付(▶pp.10-11)。視覚的にも活動内容を理解することができ、事前に内容を知ることによって安心して参加ができます。

6 打ち合わせ



ファシリテーター、制作サポーター・ケアワーカー、スタッフで事前に打ち合わせをします。

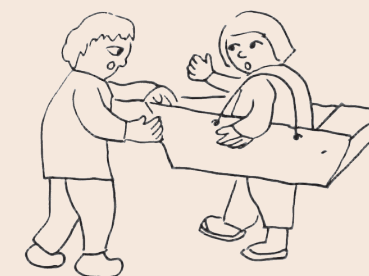
当日のタイムスケジュールを考える | 基本的に2時間半のワークショップを前半と後半にわけ、活動の内容を配分します。過集中にならないよう、前半と後半の間に10分程度の休憩を入れます。

参加者の共有 | スタッフからその時点での参加者情報を共有し、必要な配慮について確認します。

役割分担 | 制作をサポートする人、個別の対応が必要な参加者につく人、全体を見守る人などの役割分担を決めます。

7 道具や材料の準備

必要な道具や材料の調達と準備、当日制作するものの見本が必要なときは制作日を決めて仕上げておきます。材料は新たに購入するもののほか、すでにあるものを使ったり、持参を呼びかけたり、提供を募ったりすることもあります。



ラップなどの紙芯、牛乳パック、新聞紙など身近なものも立派な材料になります！

参加者へのお手紙

ワークショップ前にファシリテーターから参加者へ送られたお手紙です。

8/7(日) のワークショップは...
ポポポポのアタマでおぼぼう! です

こんにちは、お元気ですか?
 今回のワークショップは、ポポポポのアタマを制作して、おぼぼう! の人形劇を上演します。
 ポポポポのアタマ (はし) は、アタマ (顔) のアタマ (顔) です。おぼぼう! のアタマ (顔) は、アタマ (顔) のアタマ (顔) です。
 アタマ (顔) のアタマ (顔) は、アタマ (顔) のアタマ (顔) です。アタマ (顔) のアタマ (顔) は、アタマ (顔) のアタマ (顔) です。

材料 / ティッシュペーパー、おぼぼう! のアタマ (顔) (30cm x 20cm x 1cmの厚さあり)
 ・色紙 ・ポン・ポン ・テープ ・ペン



広場の人形劇
 ファシリテーター
 工藤夏海さんより

ポポポポのアタマが完成したら、おぼぼう! の人形劇を上演します!

おぼぼう! の人形劇は、おぼぼう! のアタマ (顔) を使って、おぼぼう! の人形劇を上演します。

おぼぼう! の人形劇は、おぼぼう! のアタマ (顔) を使って、おぼぼう! の人形劇を上演します。

つくりかた

① 体にはうごきをつける
 ② 顔で目や鼻はなをつくる
 ③ がざり (髪) もようをつける

① 体にはうごきをつける
 ② はしにテープをはる
 ③ がざりをつけておぼぼう!

11/20(土) 11月20日 (土) 11月20日 (土)
 今回のワークショップは、おぼぼう! の人形劇を上演します。

① 舟は人が入って動くタイプ
 ② 人は長い棒でもって動かすタイプ
 ③ がざりはヒモに布や紙で作ったおぼぼう! の髪をつけて、舞台をかまそくするもの

2時間半くらいで作り (休憩も挟んで)、最後に10分ほど動かす練習をします。音楽を聴きたい人はいくつか楽器があるので演奏もできます。曲を作ってもおもしろいですね。
 今回作ったものは2月の上演で使うので、会場で保管します。

みんなで作るよ! 広場の人形劇! 4月14日

みなさんこんにちは! お元気ですか?
 さてさて、1月15日は人形劇ワークショップの日。
 今回はゲストで「おぼぼう! のアタマ (顔) 」 (おぼぼう! のアタマ (顔))
 アタマ (顔) のアタマ (顔) は、アタマ (顔) のアタマ (顔) です。

① てっちゃんに人形のうごきかたを習います。
 ② 次に、さたけさんたちがステージ用の舟をセッティングしてくるので、みんなで作るよ!

① 舟には人が入って動くタイプ
 ② 人は長い棒でもって動かすタイプ
 ③ がざりはヒモに布や紙で作ったおぼぼう! の髪をつけて、舞台をかまそくするもの

ゲストファシリテーターより

2022年11月19日
 みんなで作るよ! 広場の人形劇!

今日は、「みんなの人形劇場」をつくらせよ!
 みんなの人形劇場をつくらせよ!
 みんなの人形劇場をつくらせよ!

① 舟は人が入って動くタイプ
 ② 人は長い棒でもって動かすタイプ
 ③ がざりはヒモに布や紙で作ったおぼぼう! の髪をつけて、舞台をかまそくするもの

2022.10.15 本川東洋子さんより

2022年10月15日
 みんなで作るよ! 広場の人形劇!

今回は...
片手人形劇

今回は、紙封筒を使って人形を作ります。
 みなさんは片手人形を知っていますか?
 片手人形を動かす人形です。

材料
 ・紙封筒
 ・ポン・ポン
 ・厚紙
 ・布・毛糸・色紙
 ・ペン・ボンド
 ・ポン・ポン
 ・両面テープ・テープ

2022.11.19 大沢佐智子さんより

人形劇ができたから、
 みんなで動かして遊ぼう。
 その時、舟のうごきかたを動かす時。

最後に、人形を動かして、
 運動会をしましょう!

ついに、
 玉入れ!
 何かに何かがあるかな?

2023.12.3 菊池聡太郎さんより

こんにちは、ようちんです。「みんなで作るよ! 広場の人形劇!」
 12/3(日)のテーマは、「なりたい物になって歩く」です。

1体ごとに入ることができる大きな箱の人形や、頭にかぶったり、
 手に持ったりできるお面をつくらせよ。自分がなりたいところ
 を想像しながら、思い浮かんだ物や動物の形を作って
 身につけてみましょう。そして、人形やお面の中に入ると
 どんな気持ちになるか、顔の世界がどんな風に見えるか
 観察してみましょう。

今度はその橋で、
 部屋の外に出たおぼぼう! の行き交う人や街の
 すがたも、おぼぼう! と違って見たり、歩いて
 いる自分の周りの風景を少し変えたりするのも
 楽しいですね。いよいよ楽しいなから、やらせよ
 歩いてみましょう!

ある日のワークショップ

仙台市内の施設で開催したワークショップの1日を紹介します。

テーマ「大きな人形をつくらう！」

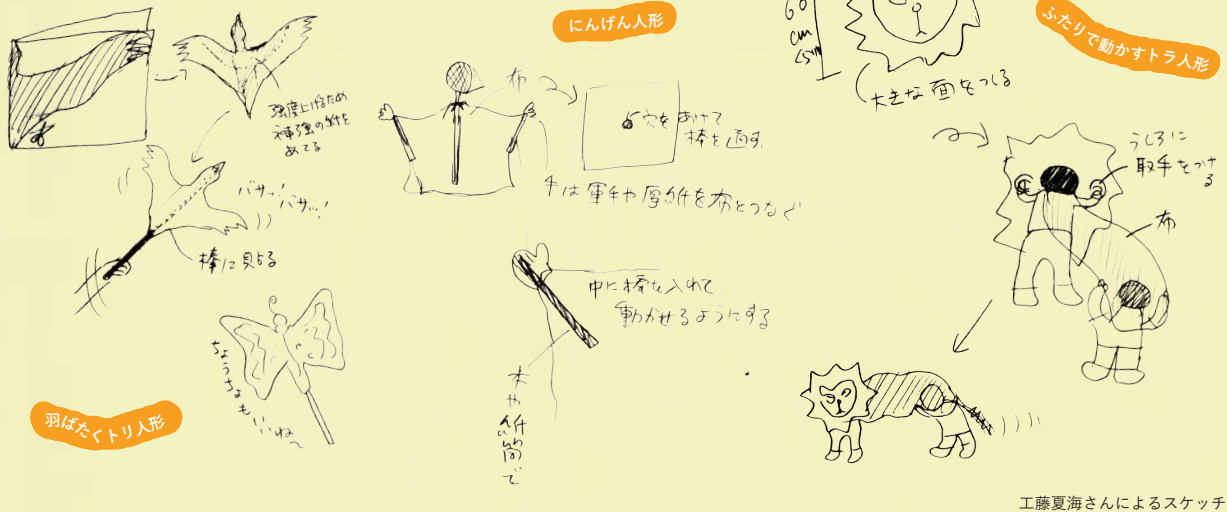
事前準備

●見本づくり

どんな人形をつくりたいかイメージしたり、人形の構造を知ることができるよう、見本をいくつかつくる。

●材料の準備

段ボール箱、虫取り網、布、色紙、など



工藤夏海さんによるスケッチ

●参加者への事前案内

○今回の活動について

テーマは「大きな人形をつくらう！」です。自分のからだくらい大きな人形をつくりたい。数人で1体つくっても、ひとりで1体つくってもいいです。

○つくりかた

- ・かぶったり動かすことを考えながら土台やパーツをつくる。
- ・動きを確認しながら組み立てる。
- ・色や装飾をつけて完成！
- ・ほかの人の人形も見てみよう。
- ・人形の動きに合わせて音もつけてみよう。

○格好

- ・汚れても大丈夫な動きやすい服装や、靴がおすすめです。
- ・着替えが必要な人は持参してください。ただし着替える場所はトイレになります。



にんげん人形

当日

会場は、仙台市地下鉄東西線「国際センター」駅の2階にある「青葉の風テラス」。大きな窓から外の景色が見える開放的な空間です。この日は12人の参加者、6人のスタッフ・ボランティアで活動しました。

①スタッフ集合

打ち合わせをして、会場準備。テーブルと椅子をワークショップ用に並べ替え、床や机に養生用のシートを貼ります。ホワイトボードに今日のスケジュールや説明を書く、材料や楽器を並べる、受付、などを分担しながら準備します。

②受付開始

ゲームテープにマジックで呼んでもらいたい名前を書いて、服に貼ってもらいます。スタッフも同じように貼ります。

③ワークショップスタート！

スタッフの紹介、トイレの位置など会場の案内、記録撮影の確認をしたあと、ファシリテーターがホワイトボードを使って、今日の流れを説明します。

④見本の人形を見る、動かす

見本の人形を見たり動かしたりしてみます。不思議な存在感を放つ大きな人形や、棒を動かすと羽ばたくトリ。ふたりで演じるトラは、ひとりが持ち手の付いた顔を持ち、もうひとりは前の人の後ろに付いて、大きな布を被って獅子舞のように歩きます。自分より大きな人形や全身を使って操る人形に、驚き、ワクワクした様子みなさん。見本を見てつくりたい人形のタイプを決めて、創作スタートです！



ふたりで動かすトラ人形

羽ばたくトリ人形



リュウグウノツカイ



⑤人形をつくる

どんな人形をつくりたいか質問すると、「すごいものをつくる！」「大きな人！」「ヒラヒラをたくさんつけたい」「アイドルをつくりたいの」「リュウグウノツカイみたいにキレイなイメージです」と、早い段階でおおよそのイメージをもってつくりはじめた人が多く、制作がはじまるとあまり迷うことなく集中して手を進めていました。ただ見本をまねるのではなく、材料を吟味し、工夫を重ねて、オリジナルの要素がたっぷりプラスされていました。このとき、にぎやかな場所が苦手そうな初参加の人がいたので、少し離れた場所にひとり用の作業場をつくりました*。スタッフもこまめに声がけしながら、落ち着いて創作ができたようです。

⑦つくった人形を発表する

養生シートの上を片付けてステージを決めます。つくった人形を持ってひとりずつ前に出てもらい、ファシリテーターがインタビュー。人形の名前や性格など人形のキャラクターが見えてきて、人形同士の関係性、必殺技！など、それぞれの人形に物語がありました。人形が動くのに合わせて楽器を演奏し盛り上げてくれる人もいました。

⑥休憩

10分間の休憩。お菓子や飲み物でひとやすみ。

*気持ちを落ち着かせたいときや疲れたときに利用できるよう、会場内にパーテーションなどで仕切られた「カムダウンスペース」をつくり、会議室などの別の部屋を案内することもあります。

⑧ぱれーど

最後はつくった人形を動かしながら、会場内をパレードのように歩きます。色とりどりの人形たちが、音楽に合わせてコミカルに動いたり、ふわりふわりと踊る様子は、おとぎ話のワンシーンのようで、気付けば何周も楽しんでいました。



ある日のワークショップ

オンライン開催編



オンライン (Zoom) で開催したワークショップの1日を紹介します。

テーマ「素敵な表現に注目！フィーチャータイム」

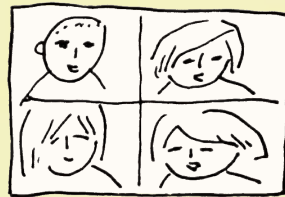
事前準備

●Zoomの操作方法を学ぶ



スタッフでZoomの開設、操作方法を学ぶ。また、参加者の自宅の通信環境や使用機器の確認をする。初めてZoomを使用する人や操作が不安な人には、事前にスタッフと接続のテストをおこなう。

●オンラインミーティング



ファシリテーターがアイデアを伝え、スタッフとともに細かな当日のプログラムを決定。チーム分けは参加者とスタッフの特性や特技などを考慮し、おもしろくなりそうな組み合わせを決めておく。

参考資料

障害のある人が参加する「オンライン・アトリエ・レシピ集」(編集・発行：NPO法人エイブル・アート・ジャパン)
https://ableart.org/topic/project/202009_atrirecipe.html

●見本づくり

家にあるものでつくる人形や舞台装置のアイデア



●Zoomを使った人形劇のアイデアを考える



○会話
画面ごしにしゃべってみる

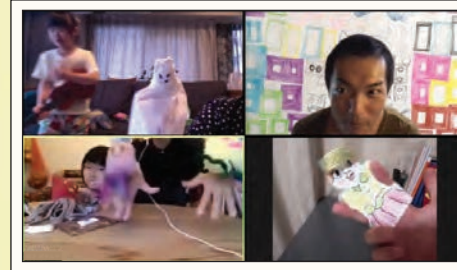
○距離
カメラに寄ったり離れたりしてみる

当日

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、オンラインを活用したワークショップも試してきました。今日はその2回目です。9人の参加者と4人のスタッフ・ボランティアが自宅から参加しました。

①参加者入室

全員入室したらまずは音楽に合わせて手の体操！前回のオンラインワークショップ1回目で、楽器を演奏する参加者の手の動きがとても素敵だったので、今回は手を活用した人形劇をやることにしました。



②準備体操

手をカメラに近づけて画面いっぱい映し、指を曲げたりゆっくり動かすことで、生き物のように見えてきます。次は手の表現が活きるタイプの人形をつくります。みんなでカメラに向かって動かしてみます。「みんなバラバラなのがいいなあ」という声があがります。



③休憩

ここで5分間の休憩です。お茶を飲んだりお菓子を食べて目を休ませましょう！

④グループワーク

後半は、3グループに分かれて人形劇をつくります。チームの組み合わせを発表！それぞれのチームごとに小部屋 (ブレイクアウトルーム) に移動して、5分程度でストーリーをつかって練習。時間が来たら全員の画面に集合して、1チームずつ上演します。ほかのチームは観客です。

一人ひとりの動きに注目するフィーチャータイム (FT)

ワークショップ中、素敵な表現をしてくれた「いま！」という瞬間に気づいた人が手を振るなど合図をして、画面を通してみんなで注目する時間です。FTが来たらフィーチャーされたものをみんなで見たり、それに合わせて動いたりします。

⑤グループの発表を見る

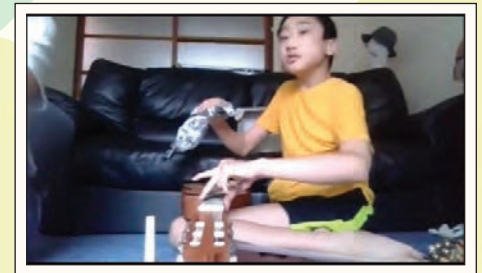
A グループ | お散歩をしている途中でいろいろな動物に出会う少女の物語。いつもは音楽や美術を担当しているシャイな参加者が「セリフをがんばって言うてみる！」と勇気を出して演じてくれた。

B グループ | 音楽フェスティバルで歌う人とそのライブにきている人の物語。ソファの上でウクレレを弾きながら歌う子を中心にフェス仕立てにし、人形は歌に合わせて踊った。

C グループ | 哀愁の漂う演奏にのせて、女子学生同士の日常を描いた物語。ファシリテーターとスタッフのダウンナーな掛け合い。

⑥感想の共有

グループの発表や今日のワークショップをふりかえり、感想を共有しました。



スタッフ・ファシリテーターの感想

フィーチャータイムを設けたことで、決まった時間に表現することが苦手な人でも、自分にとってのベストなタイミングでパフォーマンスを披露することができました。その結果、みんなが主役になれ、お互いのことをより知ることができたと思います。

参加者の感想

- ・みんなで1ヶ所に集まってやるよりは、好き勝手というか、やりたい放題といいますが、照れずに人形を通して(人形として)話せたと思いました。
- ・スタジオでは見ていなかった人形の細かい表情や角度も知れて楽しかったです。
- ・オンラインという制約があるからこそ出来た表現が少し見えた気がしました。
- ・発表中や発表後の感想など自由にチャットに書き込んで、あとでファシリテーターがそれを読み上げるなど、チャットをもっと活用しても良かったと思います。

創作する身体

工藤夏海 (美術家、人形劇団ボンコレラ、みんなでつくるよ広場の人形劇!ファシリテーター)

ワークショップに参加するみなさんと過ごす時間のなかで、何度もハッとさせられ、終わってからも胸のなかで光り続ける—そんな瞬間や出来事がたくさんありました。この5年間で、そういったささやかだけれど大事な出来事からわたしが学んだことを、いくつかあげていきたいと思います。

従わない(従えない)ことの表明

わたしが感動したことのひとつが、創作過程で「それはやりません」「それは要りません」と言葉や身振りで表明されたことです。参加者の年齢や特性が幅広いので、できる/できない、したい/したくないの幅も広い。ここで言う「従わない」はポジティブな行為ですし、「従えない」は切実な行為です。一人ひとりが独立した表現する人と捉えれば、あるテーマで集まったとしても、同じことを無理してやる必要なんかないし、さまざまな人が集まっているのに1個の作業しかできないのは良い場所とは言えないのではないかな。沿えない人がいたとき、プログラムに無理やり沿わせるのではなく、その人がやろうとしていること、身体が動くものに気づいて素早くセッティングすることが大事だと学びました。

やりたいことは明確です

そうやって大枠はテーマに沿って進行しつつ、それ以外の動きにも関心を寄せていくと、なにをしたかったのが明確に伝わってきます。それを見ているうちに、こちらも予定していなかったアイデアが浮かんだりして、「もう1回こっちでお願いします!」と持ちかけたりします。従わない身体から生まれた表現なので、頼んで同じことをしてもらえとは限らない。そういうときはこちらが移動しその表現を囲むようにして、中心をずらしました。(p.15「フィーチャータイム」参照)

そういうことを繰り返すうちに、自然と、ももとのテーマと混ざり合って、みんなでそのときどきに生まれた表現を逃さず楽しむことができるようになっていきました。

一丸とならない(なれない)ことで生まれる景色

もともと、単発参加OKなので、台本を覚えて練習を重ねるものではなく、その場でつくっていくやり方をしてきました。その場で起こることを取り込みながらつくる舞台には予想外のおもしろさが生まれます。衝突状の幕を張った舞台をケコミと言い、人形つかいがその後ろに隠れて人形劇をするんですけど、ケコミの前に寝っ転がって上から出てくる人形とやりとりしたり、椅子を使って自分も人形と一緒に幕の上に出て演じたり、幕の前でマイクを持って歌をうたって後ろの人形がそれに合わせたり、劇が終わりがけたときに横からスッと人形を手渡す人が現れて話が続きたり。思いついたことは躊躇なくやる、そして疲れたら横になって休む姿を見ていると、そうだった、そうだった、これが自然な創作の姿だったと思わせてくれるのでした。

人形劇って最高!

人形は人と向き合うときのハードルを下げてくれるし、いつもの自分から離れられるので思い切ったこともできます。さらに、人形劇のなかの役割は音楽、舞台装置、小道具、照明、など多岐にわたるので、その人の特性や好みを活かしやすいです。たとえば「棒遣い人形をつくろう」というテーマの回でも、手作業の可能な範囲にはバラつきがあるし、そもそも人形劇のためのワークショップなので他の要素があれば困るところか豊かになる。来てすぐお気に入りの楽器を見つけて弾き続ける人は楽団員ですし、絵を描く人は舞台美術家なので、欲しい装置をお願いしたらつくってくれる—なんてことも起こるのです。アメイジング。そのようにしてつくることのできる人形劇って、最高だなと思います。

工夫はみんなの役に立つ

舞台装置をつくったときに、身長によっては踏み台が必要だったので、踏み台無しで使えるようにバーを2種類の高さにパッと簡単に換えられるようにしました。後日、4歳の子が演じに来たので自信満々でさっとバーを下ろしたんですが、その子がバーを手でググ!と下に押したので、ぐらつかないように慌てて支えました。自分の顔を出してお客さんを見ながら演じたかったようです。そこで、ただ下げるだけじゃなく、押し下げても大丈夫のようにバーを長さのある太めの輪ゴムで吊ることにしました。これで、バーに手をかけても輪ゴムがバネになって上下するのでひと安心です。ひとりの子のための工夫でしたが、力の加減が難しい人にとっても良いだろうし、さらにこの工夫が舞台装置の新しい仕組みとして活用できるかもしれない。制作する側にとっても、既存のものを、使う人に合わせて作り替える技術を得る機会にもなるのでした。

完璧さとは違うおもしろさをワークショップでは目指しているのに、自分の役割は完璧にやらないといけない気がして悩んだり、しっかりしなさと肩に力が入ったりすることもありました。でも参加者のみなさんと一緒につくる居心地の良い場所にいると、自分にも特性があって、それを活かしたことをやればいいんだなど自然に思えてくる。自分ができないことは誰かが得意だったり、その逆もあったりするわけで、「これやります」「これ頼める?」「これはやらなくていいよね」「これは絶対やりたい!」と、わいわい一緒につくる場が続けていけたら良いなあと思います。



サポートの立場でありながら、だれよりも楽しんでしまいました。

ワークショップ

人形劇を発表するだけではなく、人形や小物制作、舞台美術や楽器演奏など、それぞれがムリなく得意なことを出来るのが、マイペースな我が子たちにはとても良かったと思います。



みんなで作るよ広場の人形劇!にしかない雰囲気や創作の過程が面白くて、私たち親子にとって刺激をいっばいもらえる大切な場になっています。



学校や放課後デイでは体験できないことをたくさん体験できました。それから、すぐく出会いが多かったです。子どもの心の成長としては、人とのコミュニケーションにすぐ自信がついたなと思います。そう思ったのは、まず、表情が違いました。ドヤッとする表情とか。また、わたしではなくたくさんの方に自ら関わっていく場面が見えたので、そういう行動からも自信が溢れているなど感じました。



楽しかったです。子供たちに混ぜてもらいました。次も混ぜていいですか?

これまでの活動を厚く参加者

ぶちやまぜ
キャラクター

スアワーカー・ボランティア

ゲストの声で紹介します。





人形を持つこと、人形を介すること、舞台にかかれることで、より自由に表現し楽しめる「人形劇」というものが、いろんな子どもたちにとっての力になるのではないかと、子どもたちが夢中で人形を作ったり、自由に動かしたりする姿を見て改めて感じました。
(2023.2.25 ゲスト / 転太 : 土屋高志 / てんたん人形劇場主宰)



何かを決めたり、形にする時、私たちは言葉で議論することで物事を前に進めていくことに慣れていますが、物を作ったり、作ったものを動かしたりしながら表現をする場では必ずしも言葉は必要ではないし、特に広場の人形劇の場では、参加者の小さな仕草とか、使った色とか、これを手に持った!とか、なんか嬉しそうとか、嫌そうとか、そういうより繊細な動きそのものに気付いたり、応答したりすることがとても大事な気がしました。
それは、本当は特別なことではなく、また障害があるかないかに関わらず、他者へのケアや心配りにつながる視点かも知れないし、それは個人の表現とか制作の場においては、材料や空間、社会、そして自分自身への気付きや応答、ということになるのかもしれないと考えさせられました。
そしてやっぱり、ふだんの社会的な役割をいったん脱いだり預けたりして振る舞う場を作ることができる人形という仕組みの果てしない可能性を感じました。
(2023.12.03 ゲスト / 菊池聡太郎 / 美術家、建築ダウナーズ、PUMPQUAKES)

自分の好きなものが自分の手で形となり、動き、しゃべり出す楽しさ!! とてもよい体験でした! またやりたい! と家族で話しています。



参加前は作業手順や、進行を細かく計画を立て話し合いますが、毎回参加者の発想に驚きます。企画者の計画はあくまで計画であって、参加者がその計画を脚色していく(土台に花を活けていくイメージ)。それが重なって行って成り立っているのが広場の人形劇ではないかと考えます。また人形というモノを通しての表現は、人と人のコミュニケーションと違って、人形の動きで伝えたい言語を表現でき、子どもも、大人も障害の有無も関係なく表現できるツールなのではないかと改めて感じました。
(2022.10.15 ゲスト / 本川東洋子 / 造形家)



ワークショップ



進行も即興要素が多く、一瞬一瞬ここに居合わせたみんなで手探りで作っていき、その瞬間をそれぞれの着目で見たり聴いたりして動きと音の波が影響しあい、今とほんの少しだけ先を想ったりしながら、同時多発的におのおのが呼応し、みんなで、あまり誰もが知っている感じではない感じの時間、みたことのない場面へとひらかれていったとおもいます。
(2023.10.29 ゲスト / 山路智恵子 / 主に打楽器や日用品を使用した即興演奏)

ワークショップの時間や人形劇の舞台作りの中で、正解というものはなく、その場を一緒に楽しむ関係がより深まっていると感じました。



子どもはわたしが変なことをしていても気にしないでくれるから、子どもたちと遊ぶのは楽しいです。最初は、人に会うことに慣れる訓練のためにずっと来ていました。今は、人と会いたくて来ています。人が好きになりました。人が嫌いだったんです。ここはいじわるする人がいないし、何か失敗しても怒られないし、ここは楽しいです。



上演

日立システムズホール仙台
交流ホール

4歳の息子と参加しました。親が予想したことをすべて裏切り、自分の思うままステージをウロウロする姿に母は内心ドキドキしていました。劇中は、他のみなさんの自由な発想に、わっはっは、ドキドキ、あちゃー、と様々な感情を引き出され、とても刺激になりました。



言葉をしゃべらないでいこうと思っていたんですけど、つい本番に適當なことをしゃべってしまったって、話をどうまとめようか考えながら即興でやっている時間がとても怖かったです。ですけど、やってみておもしろかったです。



2022.06.11 / 「Aiんどご市」 / ぶらんど〜む一番町商店街



実際に舞台上でみると、飛び入りするメンバーに助けられたりすることがすごくあって、「自分がひっぱらなきゃ」なんておこがましいなって思いました。いっぱい助けてもらってありがとうございました。



とても楽しかったようで、終了後は魔法が解けたようにぼ〜と外を眺めていました。



それぞれがいつどこでどんなことをやっているのかわかって、お互いに見たり聞き合ったりするっていうのがこの劇の中ですごくおこなわれているのが、とてもかっこいいなって見せてもらいました。

作ったものを身につけてみんなで一緒に外を歩いた時、街をいつもより自分たちのもののように感じられた気がしました。ふだんの社会からの見られ方や認識のされ方を越えた姿になることで、歩いている私たちの周りに出現した空間が、街の景色を主体的に変えているということかも知れないと思いました。このようなどんな人でも参加できる創作や表現の場が外に開かれていくことは、参加者にとってだけではなく、社会にとって必要なことだと改めて感じました。
(2023.12.03 ゲスト / 菊池聡太郎 / 美術家、建築ダウンナーズ、PUMPQUAKES)



2022.09.17 / 「フラットシアターフェスティバル」 / 宮城野区文化センター、宮城野区中央市民センター

「舞台に参加者を寄せていくのではなく、参加している人たちに舞台を合わせていく」ファシリテーター、工藤夏海さんが話していた言葉が印象的だったし、そうあることを許せる雰囲気や空間があそこにあったなあと感じました。舞台ってもっとゴツゴツデコボコしていても良いのかも知れないと感じたすてきな発表でした。



2023.12.03 / 「なりたい物になって歩く」 / ぶらんど〜む一番町商店街



さまよい
ぱれーど

ふりがえり座談会

2018年度にはじまった「みんなでつくるよ広場の人形劇! (以下、広場の人形劇)」。目の前で起こることに参加者もスタッフも夢中になりながら活動してきましたが、広場の人形劇にそれぞれにかかわりをもったみんなで、これまでをふりがえりながら、そこにどのような気づきがあり、どんな景色が広がっていたのか、語り合ってみようと思います。

座談会参加者 [()内は「広場の人形劇」でのそれぞれの役割]



きっかけ/たくさんの気づき

梨佳 2018年度にエイブル・アート・ジャパン(以下、エイブル・アート)の企画が「仙台市文化プログラム」に採択されて、障害のある人が主体的にかかわることができる創作や身体表現の事業「SHIRO Atelier&Studio」(p.4 参照)がスタートしました。その年度の最後、2019年3月に、この事業のふりがえり会を地下鉄国際センター駅の「青葉の風テラス」で実施しました。その傍らで、夏海さん率いる「人形劇団ボンコレラ」(p.4 参照)に依頼しワークショップをしたのが、広場の人形劇のはじまりでした。

夏海 このときは、半日で人形をつくって演じるという内容でしたね。ワークショップの前半は人形づくり。紙の筒とハンガーを使ってまず骨格をつくり、そこに布や紙をつけて人形をつくりました。後半はつくった人形を使って、すごく初歩的ですが、挨拶をする、遠くの人に声をかける、おしゃべりをするなど、日頃やっていることを「人形を介してやる」という内容。これをたっぷりやりました。そのあと円になって、中央をステージにし、それぞれがつくったものを発表したり眺めたりしました。参加者には大人の方やエイブル・アートの「アトリエつくるて(以下、アトリエ) (*1)」に参加している方が多かったですね。

いつみ このときみなさんがつくった人形の集合写真は、なんだかバンドっぽいですね。



初回のワークショップで生まれた人形たち(青葉の風テラス)

夏海 この写真を見て「バンドっぽい」という言葉が出てくるいつみさんが、このワークショップのなにかをつくっている気がします。ちなみに、布は古着です。

いつみ 古着だから、おしゃれ感があるんですね。

夏海 このときは、音楽を瀬戸晶子さん(人形劇団ボンコレラで主に音楽を担当)が担ってくれて、円になってひとりずつ発表するとき、音をつけてもらいました。ある参加者は、瀬戸さんに耳打ちで「東京音頭」をリクエストして、その音に合わせて人形を踊らせていました。人形を持ったまま前転をする人もいて、いろんな発表方法が見られました。

千尋 この回をきっかけに、「人形劇はいいね、今後もやろう」という話になったんですか?

夏海 エイブル・アートが継続を決めて、通年で開催する広場の人形劇がはじまったんです。

桂 最初にエイブル・アートのスタッフから、「生身の自分自身でなにかをやるのはハードルが高い。参加する側も度胸がいる。マスク(仮面)をつけておこなう表現を見て、身体的な表現もありつつ人形も動かすようなものが、障害のある人にも合っているんじゃないかと思った」という説明を受けた気がします。

いつみ 障害のある人との相性という点で、人形劇をやっている理由が見えてくる気がしますね。演劇はセリフがあり生身で伝えなくてはいけない感じがありますが、人形劇は人形を介することでできることや生まれることが、いつも話題に上がりますね。

夏海 通年で広場の人形劇をやるきっかけになった初回のワークショップが、わたしにとって最初に衝撃を受けた回だったので、そのときのことを話してみたいです。わたしはワークショップの内容を組み立てて、進行する役割を担っていたのですが、いままでの人生の中で障害のある人たちと一定の時間をともに過ごして一緒になにかを

したという経験がなかったんです。だから、まずは人形劇をみんなに知ってもらって、それを体験してもらうという一般的な内容で組み立てていました。事前に細かく計画を立てて、1回目は人形をつくってみよう、人形にはいろんな種類がありますよって、知識を得てもらおうと臨んだわけです。

梨佳 実際にやってみてどうでしたか?

夏海 ぜんぜん思い通りには進まなかったんです。年齢や特性の幅が広いこともあって、全員が同じようには振る舞わない。でも思い通りには進まなかったことがぜんぜんストレスではなくて、正直で迷いのない動きを目の当たりにして、すごくびっくりして「おもしろい!」と思ったんです。進行役としては、やろうと思っていたことが実現できないのは失敗だと思うのですが、最初に「このやり方じゃダメですよ」と参加者のみなさんが気づかせてくれたおかげで、そこにいる「人」を中心にして組み立てるといえるのか、一緒に内容を考えなきゃいけないんだってことを、まず知ることになったので、初回はとても印象的で、わたしにとって大事な回でした。

いつみ わたしはもともとワークショップの参加者で、知的障害のある娘の杏と一緒に家族で参加していました。障害のある人となない人が一緒に創作活動を楽しめるところに魅力を感じ、活動をサポートしたいという思いから、2021年にエイブル・アートのスタッフになりました。最初のワークショップには、夏海さんの世界観やボンコレラが好きで参加しました。

実際に参加してみると、あまり言葉でのコミュニケーションをしない娘のような知的障害のある人でも、なにか別の役割があることや、言葉以外の身体的な表現があることに気づきました。

ワークショップに参加していたある姉妹のお母さんの話では、最初、お姉ちゃんは妹の付き添いで来ていたけれど、一緒に絵を描いたり工作をしたり、少しずつ自分の好きなことを活かしてかわれるようになってきたそうです。考えてみると、人形劇にはいろんな要素があって、役割分担をしてみんなでひとつのものをつくることもおもしろい。でも、普段の生活では、そういうことがあまりないのと、そのとき気づきました。

夏海 あと、その役割も固定されたものではなくて、どんどん変わっていくのもおもしろいところですよ。

いつみ 親の立場で感じるのには、どんな人でも、それぞれの良さが生きてくる場があるのがすごくいいなあと。娘は発達がゆっくりなので、学校では「みんなと同じようにできない、ちょっと違う子」という見られ方をしても、広場の人形劇の場ではそれが逆にすごくおもしろかったり楽しんでもらえたり「素敵だね」と言ってもらえる。そういった経験があると、自分らしさを出せるのではないかと思います。

千尋 初めの頃はなんだかみんな緊張していて、「ワークショップってなに?」って。でも、人形を通じて挨拶や動作をしてみると、スムーズに回が進んでいったような感じがしました。

桂 ワークショップの最後には、みんなの前に立って「この人形の名前は〇〇で、こういう特徴があるよ」と、人形で自己紹介をする時間がありました。ちょっと緊張しましたが、わたし自身についてではなく、人形が「わたしは〇〇です」としゃべるといって、人形の背景を伝えるような自己紹介でした。

夏海 わたし自身、大勢の前で自己紹介をしたり、ふりがえりで感想をひとりずつ言ったりするのがあまり得意ではない好きなわけでもないで、それを苦手とする人がいたときに、そうならない方法を探るといことは意識していました。実際に何人かの参加者が「感想を言うのが苦手で緊張する」と伝えてくれたので、そういう人でも表現しやすい方法を探る場面は多かったんです。でも「その感想を聞いてよかった」と思うこともたくさんあるので、緊張せずに出してもらえたらいいなというのはありましたね。

桂 子ども向けのワークショップなどで、その子のお母さんが「〇〇ちゃん、こうじゃないでしょう」と言ってしまうような場面をよく見かけます。広場の人形劇では、親がお子さんの手助けもしますが、親自身がつくることもあるし、親のことも名前前で呼んでいて、「〇〇さんのお母さん、お父さん」として見ないところがいいなと思います。また、親が子どもに乗っかってなにかをやるのではなく、みんなが同じように並んでやるというのもとても印象的でした。橘内さん親子がつくったアフリカ人女性の人形がめちゃくちゃおしゃれで素敵すぎると思っていました。家族のクリエイティビティが見えるのもすごくよかったです。

夏海 付き添いの方にも参加してもらうことは、けっこう意識的にやっていました。人形劇は大人にも作用するので、親や年長者が日頃の役割から離れる場所でもあったと思います。ワークショップの場にケアやサポートの人がほかにもいることで、それが可能だったと思います。

千尋 1回目のワークショップのとき、参加者の飛榎さんは、会場の青葉の風テラスの中をあちこち歩いていたのですが、お母さんのえりなさんなるべく創作の場にいることができるように、エイブル・アートのスタッフが飛榎さんについていましたね。わたしも飛榎さんと一緒にテラスの下にある国際センター駅まで電車を見に行きました。

夏海 最初の頃はまだ飛榎さんが楽器を好きなこと、誰も知らなかったですね。

桂 この年度の最後に、せんだいメディアテーク(以下、メディアテーク)の1階でワークショップをしたときは、大きい人形をみんなで装飾

して、その人形を持って、メディアテークの外周を練り歩きました。人形を屋外に持ち出して歩いたのがすごく楽しかったです。建物の外から、ガラス壁越しにカフェのお客さんに手をふったりしました。普通に歩いていたら、お客さんに手をふることなんてしないですが、みんなで人形を持って歩いているから「おーい」って呼びかけてみたり。

夏海 大胆になれましたね。

桂 このときに外を歩いたのが楽しかったから、「またパレードをしたい」という声も出てきたのかもしれないね。



メディアテークの外周を練り歩いたときの様子 植木が舞台のよう!

千尋 外周を練り歩いてメディアテークに帰ってきたあと、最後に1階のオープンスクエアの会場に設置した舞台上で上演をやりましたね。1年間ワークショップを重ねて、最後に発表というみんなに見てもらう機会があって、ここでようやく参加者のみなさんの性格や個性がわかってきました。

この年度は、みんなが人形を持ち、音楽に合わせて表現してみようというのを頑張っていた年だと思います。このメディアテークでの上演では、お客さんに拍手してもらい、みんながその先に進んでみたいと思うきっかけになったのではないかと思います。ちなみに、このときの上演では、飛慳さんは完全に楽団のメンバーでした。

オンラインワークショップ/フィーチャータイムの発明

梨佳 2020年度から新型コロナウイルスによる感染症が拡大し、これまで対面で実施していたワークショップができなくなりました。そこで、初めてZoom（パソコンやスマートフォンを使ってオンライン上で会議ができるアプリケーション）を使ったオンラインでのワークショップがおこなわれましたね。わたしはこのときはまだスタッフではなかったのですが、そのときの様子をぜひ聞きたいです。

夏海 オンラインでのワークショップは、少人数ごとにグループ分けができるブレイクアウトルームの機能を使って、部屋を分けてグループごとに活動してみるアイデアが活きました。このときは、わたしはZoomを使ったことがなかったので、エイブル・アートのスタッフが全部セッティングしてくれました。

桂 みんながZoomを使いはじめた頃でしたね。このとき、夏海さんがジングルのような短い動画と音楽を用意してくれていたのがよかったです。

夏海 番組をイメージしていたんです。テレビ番組の合間に入る音楽とか、手描きのコーナータイトルを用意して、画面いっぱいに見せました。これまでの対面のワークショップでは、ステージをつくって音楽を鳴らして即興で演じるのをお互いに見るという内容がほとんどで、ストーリーはそこまでありませんでした。このオンラインワークショップの1回目、部屋を分けて少人数でやってみたときに、初めてストーリーのあるものが出てきた気がします。

桂 実際にリアルで上演するよりもやるのが減るといえるのか、からだは座っていて、人形を画面から遠ざけたり登場させたり、人形遊びをする感覚にすごく近くてやりやすかったのだと思います。その場にいるのは自分ひとりなので、みんなと対面でやるときよりも人形と向き合うことになり、物語を考えたりするのに合っていたのかなと思います。

夏海 小さい動きで表現できるからかもしれないですね。

桂 高くジャンプするなどの動作も、パソコンやスマートフォンの画面のなかで十分できましたね。

千尋 画面からのイン/アウトもしやすいし、桂さんと参加者の^{まゆ}茉侑さんがお互いの画面から画面にドーナツを受け渡すなど、画面越しに人から人へ物を受け渡す場面もありました。スタッフがなにも言わなくても、参加者のみなさんからおもしろいアイデアが出てきていました。

桂 茉侑さんとつくった「ドーナツ泥棒」の話は、途中から急にミステリーになったんです。茉侑さんが「みんな寝よう、疲れたし」と言うと、その場になぜかおいしそうなドーナツがあって、寝ている間に誰かに食べられてしまう。そこで「ドーナツを食べたのは誰だ!? 順番に口元を見ていこう」と、カメラに人形の口元を近づけていったら、ひとりだけドーナツのチョコが口元について、「犯人はお前だ!」と。

夏海 あのときに、茉侑さんがどんどん物語をつくっていくのが得意なことがわかりました。参加者のなかには、以前から、部屋にステージをつくり上演し撮影することを個人でやっているなべさんもいました。

桂 わたしはなべさんのお話がおもしろいなと思ったのですが、なべさんにとってこのオンラインのワークショップは、慣れたスタイルだったんですね。

梨佳 リアルで集まることはできなくても、オンラインはオンラインのよさがあったんですね。

いづみ オンラインワークショップについて、みなさんから楽しかったいろいろなエピソードが出てきましたが、知的障害がある人には、画面で練り上げられるその細かい動きや内容がわかりにくかったと思います。1回目のオンラインのワークショップで、飛慳さんや杏は、物語をつくり即興で劇をつくりはしないけど、ほかのみんなが劇をやっている間に、別のおもしろいことをしていました。そこで生まれたのが「フィーチャータイム」(詳細はpp.14-15参照)です。

千尋 リアルで会っていると、みんながそれぞれにおもしろいことをしていても、なかなか一人ひとりに注目ができないから、参加者のみなさんに「何かおもしろいことをやっている人がいたら教えてね」と伝えて、そのおもしろいことをやっている瞬間にみんなが注目する時間をとってみるという試みでしたね。

夏海 フィーチャーと言えば、いづみさん、^{れん}廉さん、杏さんのお家は、いづみさんと廉さんが人形劇をしているうしろで杏さんがウクレレを弾いていて、杏さんがいるチームはそれをうまく活かして「フェス」のお芝居をしましたよね。そのときに飛慳さんの滑らかに動く手が映り、それがとてもきれいで印象的でした。なので、それを活かしたくて、2回目のワークショップでは手が人形になるワークを考えました。

桂 千尋さんと^{みう}実侑さんと飛慳さんとやった「滑り台」のお話もよかったですよね。

千尋 実侑さんは、最初は妹の茉侑さんの付き添いで来ていたんですよ。普段はあまりお芝居に参加しないのですが、このときはしっかり参加してくれていました。

夏海 千尋さんが発表の途中で実侑さんに人形を使って「やる? やらない?」と確認をしていました。相談の場では「やる」と決めていたかもしれないけど、みんなに見せている途中で再度、千尋さんが優しく問いかけて、自分で「やりたい」と言ってやりました。全部が練習や相談をしたおりにスムーズにいくわけではなくて、そういうやりとりがあったの滑り台の劇だったので、実侑さんの「やりたい」という強い意志を感じて、よりいっそう感激しました。お母さんの腕を滑り台にしていましたよね。

千尋 そうでしたね。対面だと恥ずかしく感じる人でも、オンラインだとできるかもという可能性にも気づいた回でした。

桂 ぜんぜんうまくいかなかった回もありましたよね。つい学ばせなくなってしまったり、同じ参加者が続けて参加してくれていると、だ

んだんうまくなっていくのを感じなくなってしまったりするのですが、それは必要ないかも気づけたのが、個人的にはよかったです。普段から気をつけているはずなのですが、ふと進歩しなくちゃいけないという気持ちになってしまうことがあるんですよね。広場の人形劇でも、つくるものは毎回違うのですが、なにかをつくって即興で上演するという流れはそんなに変わらないので、参加者一人ひとりが育っていて、ワークショップの回数を重ねていくと表現に厚みが出てきて、よくなっているな、堂々とできているなと思うことがあります。こちらが意図的に育てるのではなく、ワークショップを繰り返すなかで確実に育っているなにかがある。それがすごくいいことだなと。

梨佳 進歩しなければというのは、なにかができるようにならなければいけないということでしょうか?

桂 いつのまにか「やっているからには、なにかしら上達しなければおかしいでしょ」という気持ちになることがありますが、それはよくないですね。この場を続けているだけですごいことなのに。広場の人形劇に3年間も通ってくれていることに意味がないわけがないと思います。

梨佳 広場の人形劇を通じて「なにかができるようにならなくてもいい」という考えに、桂さんが変化していったことは大きなことですね。

桂 いつもそう思いたいはずなのに、不意に忘れる。自分でやっていることに対しても、「もっと頑張ったら?」と思うこともあります。そういうときに広場の人形劇があると、ふと立ち戻れるような気がします。

上演会/予感だけがある舞台

夏海 2021年度は、ワークショップの最終回に上演を控えてはいましたが、単発での参加もOKにしていたので、例外的ですね。

桂 そうですね。大きい人形をつくる回で、すごくいい人形をつくってくれた子が、最後の上演に参加できるかどうか分からないということもありましたし。

千尋 上演前日の夜にリハーサルをしましたが、全員はいなかったですね。

夏海 もともと連続して参加し積み重ねて発表、というのではないやり方でやってきたので、外部の人が期待するものや希望するものがこのワークショップでやろうとしていることと、どんなふうになるだろうと探る時間が長かった。初回のワークショップで衝撃を受けて、自分自身が変わることになったわけですけど、参加する方に「これをやりましょう」と提案した

ときに、全員がそれをやれないし、やらなくてもいいわけで、人形劇のなかのたくさんの役割に自然にフィットしたり、その人の特性によって役割が追加されていく、そういうかたちをつくってきたところだったので、ワークショップのなかでたくさん目にしてきたすごい場面を舞台上で見せられればいいなと。

でもそれって、「出して」と言っただけのものでもないんですね。だから予感だけがある状態でどう準備していくかのチャレンジでした。早い段階で舞台図面、構成や流れのイメージはあったので、三つの鳥や大きい人形、船などをワークショップのなかでつくりました。当日は付き添いで来ているけど参加者としても関わっている大人たちにかなり頼った部分もあります。鳥を動かすとか、進行上必要なことは大人たちが担うことにして、そうでない部分を小さい人が担うという作りになりました。

いづみ 舞台美術の準備では、絵を描くことが好きな人には舞台美術を担当してもらうなど、それぞれの得意なことが発揮されていました。参加者それぞれの魅力が活かせるように、役割をお願いしました。

夏海 船をつくった回はすごくよかったですね。大人たちが黙々と飾りをついている横で、子どもたちが大きな船に大胆に色を塗ったりしていた。

いづみ ボランティアさんもたくさん参加してくれていました。船をつくり終えた子が、「ドレスを着たい」といって、桂さんと一緒に布一枚でいい塩梅のドレスをつくっていましたよね。

千尋 飛惺さんの演奏もよかったです。

夏海 会場にピアノがあったのもよかったですね。杏ちゃんがよく演奏していて、それぞれが創作をしているあの空間でずっと音楽が鳴っているのがすごかった。その音を携帯で録音して、上演本番の音楽として使ったりもしました。

いづみ ピアノについてケアの面から言うと、親やスタッフが「勝手に弾かないで」や「鳴らしちゃダメ」と言ってしまう場合もあるかもしれませんが、この場ではそういうことはなかったですね。

桂 最初は、この会場(日立システムズホール仙台地下1階のビデオスタジオ)は圧迫感があって、ワークショップをするのには不向きかなと思っていたのですが、人形劇のいろんなもの(人形や舞台の飾りや楽器など)があることで、ぜんぜん気にならなかったです。

いづみ この年度は仙台市市民文化事業団と共催で広場の人形劇を実施していたこともあり、事業団の担当者にいろいろ相談できたのがよかったです。たとえば、ワークショップで絵の具を使いたいとき、会場内に水場がなかったため担当者に相談したところ、事務室

に確認し、会場の外にある水場を使うことができました。ひとつの場所に留まらず、いろんな場所でワークショップをしたことで、そのぶんたくさんの発見があったと思います。

夏海 ワークショップの最終回に大きな会場での上演の機会がなければ、こんなふうに必要な装置とかつくることはなかったかもしれないですね。

あと、杏ちゃんが魚と、魚をとる網をつくっていて、もうストーリーをつくりはじめていたのもよかったです。

千尋 この日の飛惺さんもいい顔をしていますね。

夏海 わたしはこのときに初めて、飛惺さんの「あー」という声を聞いて、ハッとしました。声が演奏としての声というか、表現としての声だということに認識した回でした。



会場の一角で演奏する千尋さん(左)と飛惺さん(右)
(日立システムズホール仙台地下1階ビデオスタジオ)

桂 このときに廉さんがつくった円筒状の人形を、次の回のワークショップにゲストで来てくれた「おはなしてっちゃん(伊藤哲さん)」が動かしてくださったのですが、それが素晴らしかったです。人形の手と足の動きが独特で、昆虫のようにガニ股でガタガタと動かし、「この人形って、こんな動き方をするキャラクターなんだ」って驚きました。それまでは音楽に乗って人形を動かしたり、自分で楽しく人形を動かしてみたりライブ感を大事にすることでいいよねと話していたのですが、てっちゃんの動きを見て「おおっ!」となりました。これはすごいなって。

夏海 てっちゃんの鍛錬された人形の動かし方は参加者のみなさんにも影響を与えらると思うし、それを見てもらう回でもありましたね。広場の人形劇のワークショップは、上達をするためではなく、表現の幅がたくさんあることを知ってもら場だと思っています。

桂 てっちゃんの表現を見せてもらうということに価値があったなと思いましたし、てっちゃんがバレエシューズを履いて、「足の裏も使って動かしていますよね」「わたしもバレエシューズを買って動かしてみたら足の裏を使えるかな」と、隣で見ていた人と話したりもしました。



おはなしてっちゃんの人形操作の様子(日立システムズホール仙台2階交流ホール)

桂 あと、舞台飾りを11月のワークショップのときにたくさんつくったけどまだ足りなくて、「もしつくりたい人がいたらどうぞ」と声をかけていたら、家で年末年始にたくさんつくって持ってきてくれた家族がいました。ここに参加している時間だけじゃなくて、お家でも考えてくれていたのがうれしかったです。

また、舞台美術制作にはアトリエでファシリテーターをしている佐竹真紀子さん、しょうじこずえさんにも入ってもらいました。

千尋 わたしは出産をしてまた仙台に戻ってこれることになり、11月のワークショップから再び参加しました。

もともとわたしは人形劇団にいたので、「人形劇ってお客さんに見てもらえるもの」という感覚がすごくあって。参加している人が表現していることの楽しさに気づくかもしれないし、舞台に立つことはすごく緊張することなので、普段そういう経験のない人たちが挑戦するいい機会になるかもしれないと単純に思っていました。

上演当日やりハーサルは、スタッフ側もはじめてのことですごくバタバタしていたと思うのですが、そんななかでも、いままでのような即興の作品になっていたし、スポットライトをあびてひとり歌う人が現れたり、舞台に立つのが苦手な人も音楽隊で参加したり、ずっと会場内を歩きながら演奏をしている人もいたりして、今回の発表会という機会はすごく意味のあるものだったんじゃないかなと思いました。参加者のみなさんが舞台で自己表現できることをスタッフ側もわかったし、自信にもつながっていたらうれしいなと思います。

あと、このとき久しぶりにみなさんとお会いしましたが、すんなり受け入れてもらえるあたたかさとか感じて。だからわたしはあのとき能天気に参加していました。

いづみ わたしはこの年度の途中から広場の人形劇の事業の担当になりました。それまで参加者としてかかわってきた立場からすると、人に見せるためにやっている意識がなかったので、有観客での上演がうまくいくのかな、どんなふうで舞台として成立するのかなという不安はスタッフとしてありました。

そこから上演にむけて夏海さんや桂さんと話し合うなかで、基本的には即興のその場で生まれるものを大事にする、それをみなさんがのびのびできるように土台や場をスタッフはつくりますよ、と目標を立て、そのためになにをすればいいかという打ち合わせを重ねて

いたんです。

1月のてっちゃんがゲストのワークショップのときに、照明の技術者が見に来てくれて、いよいよ舞台監督や音響、照明のテクニカルスタッフと打ち合わせというときにコロナが流行りはじめて。最初は仙台市から「18歳未満の人が参加するイベントは中止」という通達がありました。せっかく前年の活動もふくめてみんなでいろいろやってきたので、なんとか上演できないかという交渉を事業団と重ねて、有観客ではなく無観客でやることになり、3月25日にリハーサル、26日本番と調整しました。

桂 当日は少しだけ関係者のお客さんがいて、映像で収録したんですね。(YouTubeで公開中⇒<https://youtu.be/JL1xqqlaE8U>)

いづみ 舞台監督、照明、音響が入らないことになり、自分たちでやりましたね。夏海さんが照明、千尋さんが音響をやり、舞台監督は無しで。

夏海 大きな舞台を形にするのって技術がいるし、エイブル・アートにもわたしにもその技術は無い状態でやったわけですが、照明の技術者が前日に心配して来てくれて、場面に合わせてセットしてくれてほんとうに助かりました。

いづみ スタッフとしてバタバタしながら、無我夢中でやっていた感じで、あまり冷静に上演を見ることはできていないのですが、参加者のほとんどの人が舞台に立つのは初めてだったけれど、物怖じせずに普段のワークショップでやっていることが出せていて、スタッフとしてそのような場を提供できたことにホッとしました。そして、やっぱり参加者の人たちはすごいなと思いました。茉侑ちゃんと桂さんの即興のおもしろい掛け合いもあれば、侑平くんや杏のように、なにをしかずかわからない人たちの動きや表現のおもしろさもありました。無観客だったのですが、身内や関係者を呼んで上演したので少なからずお客さんがいる状況だったこともあり、見ている人もふくめて、ハプニングを受け入れていたのがよかったです。杏が、突然舞台上に段ボールを持ってくるなど、ハラハラすることもありつつ、アトリエの佐竹さんやこずえさんという心強いサポーターやボランティアさんもいて、みんなで舞台をつくることができました。

夏海 実際に蓋を開けたらその場で起こったことを採用したり、技術の方をお願いするはずだったことを自分たちでやることになったりした。でもそれって、これまでのワークショップでやってきたことで、劇場を椅子やテーブル、布を使ってつくろうとか、照明も懐中電灯でやってみようとか。上演会の規模は大きかったけど、工夫してつくるということは変わらずできていたんじゃないかなと思います。

いづみ あと、参加者のみなさんは、わたしたちが思っているよりも、発表したり人に見られたりすることに対してモチベーションが上がって

いて、張り切ってやっていたことがわかりました。その後のふりかえりでも「またパレードをしたい」という意見もあり、人に見られていつも以上の力を発揮していました。最初はどのようなことかと思いましたが、あの上演はあってよかったなと思います。映像に残せたのもよかったです。

ただ、スタッフとしてももう少し勉強したかったというか、舞台に関わるテクニカルの人たちが不在で音響や照明を自分たちでやらなければいけなかったで、その部分を自分たちでやらずに、舞台をつくることに集中できたならまた違ったのかもと思います。

夏海 舞台監督って必要なんだねって。

桂 発表会をやらなきゃいけなくなったから大変だーと思っていたけど、参加者の親のなかには「習い事みたいな気持ちで来ている」「発表会があってよかった」という人もいて。1年の成果というか、こんなことやっているよというお披露目の場としてよかったなって。参加していた演者のみなさんも「楽しかった、またやりたい」っていう感じで、それにすごく救われました。

夏海 ほんとうにさまざまなハプニングがありました。そういう偶然起こること含めてひとつの劇ができあがったと思っています。わたしは当初、一般的な練習をしたり環境を整えたりしないところでやるのが魅力だと決めつけていたところがあったので、さきほど千尋さんが話してくれたような、舞台に立ってみる経験とか、人に見てもらい楽しさとか、そういうことの持つ可能性をじっくり考えていなかった。それで大きなホールで上演するのは難しいなとずっと思い込んでいたんです。でも、千尋さんは気楽に参加したと言ってくれましたが、そんなふうに「いいな」と思っている人がいることが、また場をつくっていくんだらうなと思います。いろんなかわりかたの人がいるからいいんだって。そういうことが広場の人形劇の隔々に反映されて、参加している人への伝わり方も異なってくるでしょうし。ふりかえれてよかった～。



上演会の様子(日立システムズホール仙台2階交流ホール)

パレード／街でさまよう

いづみ 2019年度の最後のワークショップで初めてお客さんの前

で発表したときから、参加者のみなさんの「発表してみたい」という思いは感じていましたが、このホールでの上演は、みなさんの「発表をやりたい」気持ちをあらためて感じました。それは次の年度からはじめたパレードにもつながっていききましたね。

夏海 パレードはワークショップとは別でやりましたよね。

いづみ そうですね。パレードは「障害のある人が街に出ていき、日ごろ障害のある人と関わりのない人が障害のある人と出会う」というテーマがあったので、ワークショップのなかでやるのは違うと思い、パレード単体で実施しました。

また、そうしたタイミングで、Ai(*2)さんが主催するぶらんど～む一番町商店街の「Ai どんどこ市(*3)」(以下、どんどこ市)というイベントや、宮城野区文化センターでおこなわれた「フラットシアターフェスティバル(*4)」から「広場の人形劇でなにかやってほしい」と話が持ちかけられて、外での活動として、パレードが生まれた経緯があります。

夏海 パレードをたくさんやるようになったのは、パレードが楽しいっていうのもあるけれど、「街に必要だ」と感じたからなんですよね。障害のある人と出会うことが、街にも必要だからやる。

桂 パレードは、やっているわたしたち自身も楽しいのですが、どんどこ市では、イベントの出店者も喜んでくれました。その日の11時にイベントが始まり、お店づくりの準備も終わってやっとイベントが始まったという11時30分ごろから、広場の人形劇のメンバーが商店街を練り歩くのを眺めるのは、高揚感があったようです。広場の人形劇のメンバーとお店の人たちが一緒に写真を撮ったりする場面もありました。出店者にとって、お客さんが来てくれることはもちろん大切なのですが、店番のあいだは、それぞれのブースから動けないので、広場の人形劇が練り広げる楽しいパレードが目の前を通っていくのは、すごく楽しかったみたいです。

いづみ それは2022年の8月にエイブル・アートの事務所がぶらんど～む一番町商店街にある仙台フォーラス(以下、フォーラス)に移ったことも大きいですね。桂さんがスタッフとして所属するAiの事業所も同じ商店街の並びにあり、フォーラスとも近いから絡みやすく、Aiからも何人かのメンバーがパレードに参加してくれました。

夏海 あと、「さまよいはばれーど」という名前もよかったですよね。一斉に同じように歩くのではなくバラバラだけでもひとつになっている、その絶妙な感じを支える名前。

いづみ 「さまよいはばれーど」という名前は、2022年の9月におこなわれた「フラットシアターフェスティバル」でパレードをするときに、チラシに掲載する名前を考えていて生まれましたが、まだ名前が決まる前に商店街で開催したどんどこ市のパレードのときも「さまよってき

た」という設定でやりました。その場にいる人に「ここはどこですか?」と話しかけたりしながらパレードをしましたよね。

夏海 「さまよえる」ということは一般的な社会人として生きている大人にとっても実はすごく必要なことだと思います。先頭をきって歩くとか管理をしなければいけないっていうときでも、さまよっていいというか。100点満点じゃなくていいということが、それができないわたしにとってはめちゃくちゃありがたい。だから障害のある人が楽なようにというだけでなく、うまくできない自分にとっても、そのスペースがあるのがありがたいというか。たとえば、先頭を歩いていてふりかえったときに、もし誰もついてこなかったときは自分が戻ればいいし、待つのもいい。あとは先に行くのをやめるとか、そのときどきの判断が許されるというか。それがあからさまよえるから、わたしは広場の人形劇をやったことだと思います。

桂 そういう「うまくいかないのが当然」みたいな名前をつけたいという思いがありましたね。他にも候補には「よたよたパレード」とか「ヨロヨロパレード」とかありました。

夏海 一見ネガティブなんだけど、実はなにかをすごく支えている。

梨佳 「フラットシアターフェスティバル」のパレードでも、飛慳さんがみんなの列から外れたところにいる、みんなが「飛慳さん、どこー?」って呼びかけていましたが、そういう列についていけないとか、はみでしてしまうとか、普段はマイナスに捉えられがちな行動が表現になって、そうした行為がむしろいい場をつくっているような気がしました。

夏海 からだは正直ですよ～。

千尋 人形や仮面があることで、自分自身ではないなにかになったり、なににでもなれるのが、やっぱり人形劇のいいところだと思います。

夏海 そうですね。パレードのときも人形があるから歩けるし、街の人ともすぐにかかわれる。



「Ai どんどこ市」でのさまよいはばれーど(ぶらんど～む一番町商店街)

千尋 あと、この年度では、アトリエと広場の人形劇を合同で開催した回が大事だと思います。

いづみ 2022年度は初めてワークショップに参加する人に向けて、アトリエと広場の人形劇のどちらも体験できるように、合同でのワークショップを2回開催しました。

梨佳 アトリエに参加している人が広場の人形劇でつくった舞台に立って、アトリエで描いた絵を発表したり、人形を介して描いた絵について話してくれたりなど、普段は広場の人形劇に参加していない人たちが人形劇を体験してくれたのはよかったと思いました。

夏海 これもまた初めてのチャレンジでしたよね。

いづみ 1回目はしっかりきましたね。

夏海 1回目は小さい部屋で人形劇の準備をして、大きいスペースでやっているアトリエのほうに舞台や人形を移動して上演をしたので、大勢に見てもらって盛り上がりました。

2回目は場所が逆で、人形劇の参加者は、初めて参加する大人(障害のない人)が半数くらいでした。いつもの広場の人形劇でみられるように、この日もステージの上では自然に即興劇がはじまって、「交代だよ」と言ったら、別の参加者がまた自然に別の劇をはじめるのがいつもの流れなのですが、そうはなりません。これはわたしたちもぜんぜん想定していなかったことで、いままでの広場の人形劇のようにできるだろうと思っていたので焦りましたね。その場にいる人たちで場をつくり、立ち上げていくように持っていけたらよかったのですが……。

このときのふりかえりで、わたしたちはいつものメンバー(連続で参加してくれているワークショップ参加者)、特に小さい人たちに頼っていたんだって気づきました。いづみさんが「ケアしているつもりでいたけど、わたしたちがケアされていた」と言っていて、ほんとにそのとおりだなと。

これから／とりあえず、やってみよう!

梨佳 現在の広場の人形劇は、スタッフが場を準備して参加者を募っていますが、今後の展開として、もっと参加者の人たちが主体となって場を運営していくこともあり得るのかなと思いました。

夏海 人形劇はいろんな種類があるとはいえ、内容がかぶってくるというか、毎回、別のことをやるのはなかなか大変で。たとえばエイブル・アートのアトリエみたいに、「来てその日につくりたいものをつくる」というかたちの人形劇版があるといいのかなと。人形劇のなかには舞台美術、人形をつくる、動かす、音楽、小道具・大道具、声とかいろんな役割があるから、来た人がそのときにやりたいものを選ん

でやる。それで最後に人形劇をやりたい人はやる、それを見たい人は見る—みたいな場があったらいいだろうなと思っています。人形劇ではその場にお客さんがいることが重要なので、この場所に来ると人形劇が見られるっていうふうになれば、外の人も見てもらえるし。ただ、2021年度に大きなホールでやった上演は、大まかですが台本を用意してやってみたらみんな楽しんでたということもあるので、もっといろんな人が入ったほうが人形劇の幅は広がる気がします。わたしがつくるとうしても、わたしの好みになりがちなので。都市で固定した場所を持つのはとても難しいけども、どうやったらいままで参加した人や新しい人と継続して人形劇を楽しめるか、みなさんのアイデアなり、こうじゃなにかみたいなのも聞きたいです。

千尋 わたしが「こうなっていたらいいな」と思うのは、気の合う人と劇団をつくり、その公演を見られる機会をエイブル・アートにつくってもらうのがいいかな、と。この前、人形劇団ポンコレラの公演がありました。ポンコレラの公演の前後に出演するような劇団が、仙台で増えていったらいいなと思います。広場の人形劇をつくってきた人たちの集まる場があり、夏海さんも言っていた部活のようなかたちでできるといいですね。だれ発信でやればいいのか分からないですけど、夏海さんがいることで安心して参加できる人も多いと思うので、夏海さんにはなんらかのかたちでしてもらって、桂さんや東洋子さん(2022年度ワークショップゲスト)など、かかわってもらえる人を増やし、講師の厚みもつくるみたい。予算面の懸念もあるからどう運営していったらいいかわからないですけど、ひとりでもふたりでも人形劇団をやりたいという人がいたらそれでよくて、その発表に向けて集まって創作できたらいいんじゃないかなと思います。そういう思いを持った人は宮城県外にもたくさんいて、ほんとうはそういう人たちも呼びたいと思うんですけど、いまはそんな力量もなかったり。でも、そういうことをやりたいという仲間がいたら助成金獲得など、わたしができることでかかわりたいなと思います。参加者がどういうことをしたいのかが大事かなとは思っています。

桂 続いていったらいいなとは思んですけど、それをどうやって続けるかがまだ思いつきません。3年、4年とやってきましたが、活動が大きくなってきているのはすごいことだなと思います。参加者のみんなはそのままでおもしろいのですが、その場をつくる側はなにかしら変わっていく必要があると思います。自走化するにしても、助成金で活動するにしても、どこかには負荷がかかりますし、やりたいと思って進んでかかわってくれる人やボランティアさんを増やさないと、継続は難しいだろうと思います。
思いつくのは、「ふどうばんく東北 AGAIN^{あがいでん}(*5)」という、Aiの系列のような団体では、子ども食堂やプレーパークを運営しているのですが、そこにかかわる人はみなさんすごく元気があって、ボランティアさんも進んで働いています。ファンのような人も増えていて、こんなに一生懸命にことを起こすを手伝ってくれる人がいるんだと感心しています。この場所が、得難い場所だと感じとってくれるような人が出

てくるまで、コツコツやるしかないでしょうか。

梨佳 ああ、でも単純にファンは増やしたいなと思いました。

桂 活動を見たら、おもしろいと思ってくれる人もたくさんいると思います。だから、見てもらう機会を増やす。

千尋 やっぱ、見てもらう機会があるといいですね。

夏海 それは小さい規模でも可能だと思うので、まあ一回やってみればいいのか!それこそ、やってみたらわかるみたいなお話ありますよね。

桂 「上演をやります!」というやり方ではなくても、人が集まる場所でミニワークショップをやるのはどうでしょうか。ぶらんど〜む一番町商店街のどんどこ市でパレードをやるのが恒例になってきていますが、たとえば、どんどこ市でワークショップができるブースを開き、人形劇が体験できる場を用意しておくなど、人が集まる場所で人形劇に触れられる場所をつくるのもいいかも。

夏海 いいですね。公開制作みたいな要素もあると思うんですけど、準備から上演までを短時間で見られる。普段のワークショップを見たい人もいるだろうから、「見に来て!」ってもっと言ってもよかったです。たとえば、桂さんが言ったみたいに、パレードをいろんなところに持って行ってやるみたいで、劇場をいろんなところに持って行って上演するというのも可能だと思うし、いろんな場所で創作から発表までやるというのもおもしろいだろうな。

いづみ わたしは広場の人形劇の運営スタッフを2年間やりました。参加者をサポートする立場になりたいと思えばエイブル・アートのスタッフになったのですが、広場の人形劇は参加するほうが楽しいと思えば、勝手に言って今年は運営スタッフから離れてみました。参加者の立場では、子どもと一緒に参加する楽しみもありつつ、自分の人形をつくったり、自分で手を動かしたりしたいという気持ちが年々強くなっていったので、事業としてではなく、部活やサークルのように、やりたい人がときどき集まってやるとか、大人だけ集まってやるとか、そういうやり方もいいなと思っています。

夏海 昨年末に、そういう話もしましたよね。

いづみ ただ、小さなサークル活動も楽しそうですが、いざ自分たちで場をつくと考えると、障害のある人の参加のしやすさや、安心して参加できる環境をつくること、そして継続していくことの難しさを感じます。障害のある娘が自由に自分を表現できる場として人形劇を大切にしたい気持ちと、わたし自身は単純に夏海さんがつくる世界が好きでおもしろいと思うからやっているという部分もあるし、

いろいろ複雑な気持ちがあります。

夏海 つい先日、ポンコレラの上演を見にきてくれましたよね。

いづみ そうそう。久しぶりに夏海さん主宰のポンコレラの上演を見たときに、広場の人形劇のような即興劇もいいけれど、ポンコレラのようにある程度台本があり、そのなかでおもしろいことをやるというやり方は、作品として人に見せるものとしていいなとも思ったんです。いま、広場の人形劇に参加している人のなかにも、成長過程やタイプによって、即興向きでのびのびできる人もいれば、ある程度ストーリーがあるものをふくらませていくおもしろさを楽しめる人も出てきているような気がします。千尋さんが言っていたように、いろんな劇団のグループがあって、抽象的なことをやるグループもあれば、しっかりしたストーリーがあって物語に引き込むようなグループもあるなど、さまざまなグループが出てくるといいのかなと思いました。

千尋 人形劇って、奥深いし、幅広い魅力があるんですね。

いづみ エイブル・アートでは、昨年と今年、「せんくら・リラックス・コンサート(*6)」の運営に関わったのですが、障害のある子どもたちからたくさん申し込みがあったのは、音楽は身近で楽しいイメージがあるからかなと思います。人形劇はまだ身近ではないかもしれないけど、その魅力をもっと知ってほしいし、障害のある子にとっても、自分を出せるよい機会になることを知ってもらえるように、パレードや、人が集まる場でのワークショップを積み重ねていきたいです。あと、人形劇にもいろんな人形や劇団があるので、人によって好みがあると思いますし、わたし自身も、子どもと一緒に見たいものと、自分が見たいものは異なっています。まだ出会っていないだけで、この活動にピタッと合う人たちは潜在的にたくさんいると思うので、見てくれる人もそうですが、やりたいと思う仲間を増やしたいです。今後どんなかたちで活動をつないでいけるか、ひきつづき考えていきたいです。広場の人形劇を卒業する人もいるかもしれませんが、いろんな人を巻き込みながら、すこしずつつくっていったらいいのかなと思います。とりあえずやってみる!というのは大事な気がしますね。

—

(*1)アトリエつくるて
NPO 法人エイブル・アート・ジャパンがひらいているアトリエ。なにを描いてもどんなものをつくっても OK の創作をたのしみ場。ファシリテーターがサポートしながら、普段使ったことのない画材を試したり、作品をみながおしゃべりする時間もある。

(*2)Ai(アート・インクルージョン)
「アートを通して全ての人を優しく包み込む社会を実現すること」をモットーに 2014年に設立された一般社団法人。障害のある人をはじめ少数者の立場に置かれている人々が、積極的に社会にかかわり、参画し、交流を図るイベントやワークショップなどを多数実施している。

(*3)Ai どんどこ市
Ai が主催し、ぶらんど〜む一番町商店街でひらいているイベント。福祉サービス事業所をはじめさまざまな参加者が、日頃の取り組みを、マルシェやワークショップ、アートなどを通して紹介し、市民と交流を図る場。

(*4)フラットシアターフェスティバル
NPO 法人アートワークショップすんぶちよが主催する「劇場で舞台芸術を体験する際のあらゆるハードルを取り除き、観客と劇場をフラットに繋ぐ」という願いがこめられた、すべての子どものための舞台芸術祭。

(*5)ふどうばんく東北 AGAIN(あがいでん)
2008年に設立された東北初のフードバンクの団体。生活困窮者への食糧配布のほか、「子ども食堂」や公園での「プレーパーク(冒険遊び場)」運営など、掘り所や遊び場づくりをおこなっている。

(*6)せんくら・リラックス・コンサート
仙台市市民文化事業団が2006年から毎年開催している「仙台クラシックフェスティバル(愛称:せんくら)」の催しのひとつ。「からだを揺らしても、自然に声がかでも OK!」で、子どもや障害のある人たちがみんなと一緒にクラシック音楽を楽しむコンサート。



ふりかえり座談会の様子(2023年11月仙台フォーラス7階)

ここに登場したエピソード以外にも、これまでたくさんのお出来事がありました。この活動に参加した、参加者、制作サポーター、ボランティア、ゲストアーティスト、関係者のみなさまに心より感謝いたします。



みんなで作るよ広場の人形劇！ 2018→2023
人形劇ワークショップの記録とそのつくりかた

2024年3月17日発行

企画・編集 工藤夏海
伊藤いづみ、高橋梨佳(NPO 法人エイブル・アート・ジャパン)
編集協力 清水チナツ
イラスト 工藤夏海
デザイン 瀬戸晶子、高橋梨佳
題字 実侑、茉侑、工藤夏海
写真協力 磯崎未菜

発行 NPO法人エイブル・アート・ジャパン
〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉 4-1-50 1階
Tel 070-5328-4208 Fax 022-774-1576
Mail soup@ableart.org
<https://soup.ableart.org/>

助成 公益財団法人仙台市市民文化事業団
(2023年度持続可能な未来へ向けた文化芸術の環境形成助成事業)

© 2024 ABLE ART JAPAN. All Rights Reserved.